

ITL News
Institute for Teaching and LearningNo.10
2008 夏号

新任教員を対象とした 実践的研修プログラムへの挑戦

FDを巡る情勢と本学の取り組み

我が国の高等教育は「大学全入時代」を迎えて、大学入学者の学力と学習意欲の二極化と低下、進学動機の多様化が高等教育の在りように大きな影響を与えていると言われています。本学においても、これまでより優れた能力を有する学生が入学してくる一方、学力と学習意欲の両面で課題を抱える学生が一定数存在し、全体の授業運営を再考する必要性が複数の学部から報告されています。

これら学生実態は、自治会が実施する新入生アンケートや、大学が実施する授業アンケートなどでもあらわれており、授業には

熱心に参加するが、授業外の学習は必ずしも十分でない様子（授業外学習の1日あたりの時間が「15分未満」である学生が全体の62%を占める）が伺える結果となっています。また、授業中の私語についても、一部では深刻な問題として浮上しており、授業規模の適正化、施設条件の改修、TAやES*を導入した授業支援などの要望が出されるとともに、教員自身の教授方法改善に向けた支援についても意見が寄せられています。

また、『学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）』（中央教育審議会大学分科会、制度・教育部会）では、ワークショップやピア・レビューを取り入れた実践的FDの推進、新任教員を中心とした実務家教員や非常勤教員に対するFDの実施、教員の求めに

CONTENTS

- P1** 新任教員を対象とした実践的研修プログラムへの挑戦
- P4** 教育開発推進機構が担う新分野のご紹介
- P5** 第三者の意見紹介
関西地区FD連絡協議会設立総会報告
- P6** 学部・教学機関の教学的取組紹介

- P7** 2008年度 TA全体研修開催報告
学外FDフォーラム探訪記
- P8** 山形大学と立命館大学の包括的協力協定締結について
川口学長のFD通信
紀要『立命館高等教育研究』の原稿募集
教育開発推進機構のウェブサイトリニューアル紹介

応じた授業実態の診断、具体的な助言を行うコンサルテーションの充実等を各大学に求めています。

※ES (Educational Supporter : 教育サポーター) は、授業において教員や学生のサポートをする学部学生スタッフです。学生からの質問対応や教材作成の補助などを通して、より良い学習効果を生み出す役割を果たしています。また、ES自身にも学問的専門性や幅広い教養を涵養する機会となっています。

新たな新任教員研修の開発

本学では、新任教員向けの研修を3年前に大きく見直し、新任教員が円滑に授業ができるよう「着任時研修」を実施しており、毎年9割近い参加教員から「役立った」との回答を得ています。また、年間を通して行われるフォローアップ企画においても、「他の先生方と授業工夫についてもっと意見交換したい」、「このような支援体制が継続してあると、授業を行う際にも安心感が生まれる」、「学生とのコミュニケーション方法について学びたい」、「他の先生の授業を見学したい」といった積極的な意見・感想が参加教員から寄せられています。このため、2007年度には「新たな新任教員研修プログラム開発に向けた検討ワーキング」をセンター内に設置し、これまで以上に丁寧な支援ができるよう実践的かつ体系的な新任教員研修プログラムづくりを検討してきました。本ワーキングの議論を踏まえて、2008年度からは新任教員を対象として、教育力量の向上を支援する「教育支援プログラム」を試行的に実施しています。

2008年度 教育支援プログラム

【プログラムのテーマ】

立命館大学における「学習者中心の教育」の実現

【プログラムの目的】

- ① 効果的に授業を運営する能力の獲得
- ② 自らの授業を省察できる能力の獲得
- ③ 教員同士のFDネットワークの構築

前期セメスター

● ランチタイムFDサロン

FDサロンでは、昼食をとりながら、身近な教育実践について気軽に情報交換を行い教員のニーズを把握しています。また、6月以降に行う模擬授業ならびにワークショップのガイダンスを行っています。



【報告】

◎実施日時：6月3日(火) 12:30～13:30

衣笠キャンパス レストラン「カルム」

◎実施日時：6月4日(水) 12:30～13:30

BKCキャンパス エポック立命21 K308会議室

参加者からは、大規模授業の運営方法や学生との接し方、施設の改善等について疑問や意見が出されました。これらの疑問、質問に対しては、



機構所属の教員が助言するだけでなく、前年度着任教員が新年度着任教員に自らの事例を紹介するなど、参加教員同士の交流が進みました。また、民間企業や初等中等教育機関での勤務経験がある教員からは、「大学では教員間でコミュニケーションをとる機会が少ないように思う。このような企画を通して、教員同士のつながりを深めていくことができれば、より働きやすい環境になっていくだろう。」といった感想が聞かれました。

● 模擬授業 (公開授業と研究会)

模擬授業は参加者が学生心理を理解し、授業における知識伝達を効果的に行うことが出来る能力を身につけることを目的にしています。また、本授業は授業実践の方法論を取り入れた公開授業とし、授業終了後に研究会を実施することにより、参加者が自身の授業運営の改善に役立てることのできるものとしています。

【報告】

◎開催日時：6月22日(日) 10:00～14:00

◎場 所：衣笠キャンパス 存心館3階 811教室

◎講 師：加藤善子 教育開発推進機構講師

模擬授業では、加藤講師が学生コミュニティを形成の必要性や、青年心理の発達段階に沿った授業の進め方についてグループワークを取り入れた授業を展開しました。



参加者は、授業の内容を興味深く聴くとともに、学生が置かれている授業環境やグループワークでのディスカッションを疑似体験することができ、新鮮な面持ちで取り組んでいました。

● ワークショップ

◎開催日時：7月5日(土) 10:30～14:30

◎場 所：BKCキャンパス エポック立命21 K309会議室

§ 1. 授業における視覚情報の重要性とは？

参加者が一人ずつ1分間の無言面談を行い、その印象を参加者間で交流します。学生にとって教壇に立つ教員がどのように見えるかを自身で確認します。

【報告】

第1印象を決定づける要素は、55%が視覚情報(表情、態度)、38%が聴覚情報(声の速さ・大きさ、口調)、7%が言語情報(話の

内容)とされています(メラビアン¹の法則)。そのため、初回の授業では、授業内容の工夫のみではなく、学生にどのような印象付けを行うか自身を演出することも重要です。そこで、6人1グループに分かれ、各教員が無言の面接を受けることを通して、自身が視覚のみで与える印象を参加者間で交流し、ビデオで撮影した面接の様子を確認しました。

§2. 学生の深層心理を知る方法とは？

カウンセリング研修でも使われる「犬バラ法」を用い、受容的な聴き方や表情が、いかに相手の気持ちを引き出す際に有効かをペアワークで実践します。



【報告】

話の聴き方や表情が、いかに相手の気持ちを引き出すことに影響を与えるかをペアワークで実践しました。また、上手な聴き方をされたときには、自身も気付かなかった深層心理を語ってしまうということも、参加者は身を以て体験しました。

後期セメスター

● ランチタイムFDサロン

前期セメスターの振り返りや、後期セメスターの授業開始に当たっての授業計画について、昼食をとりながら気軽に情報交換します。また、10月に行うオンデマンド授業とワークショップのガイダンスを予定しています。

● ワークショップ

§1. 学生から本音を引き出す方法とは？

学生からの話の聴き方について、5つのパターンを試します。どのような聞き方をすれば、学生の本音を引き出せるかを確認します。

§2. 学生への効果的な指示・注意方法とは？

授業中の私語を注意する方法等を例に挙げ、相手の気持ちを大切にしつつ、自分の主張を伝えるアサーション・トレーニングを行います。

● オンデマンド授業

教育を実践するバックグラウンドとして必要となる知識(高等教育論や教授・学習理論など)をテーマとした理論編オンデマンド授業と、授業実践の事例紹介や学生スタッフの活用例を盛り込んだ実践編オンデマンド授業を提供することを予定しています。また、オンデマンド授業の受講を通して、Webコースツールの利用方法の理解を深めます。

次年度の本格実施に向けて

■ プログラムの構成

本プログラムは、①系統的な理論、②技術的なワークショップ、③個々の教員ニーズに応えるコンサルテーションの三本柱で構成し、修得した内容が今後の教員の教育力量向上に役立つ「実践的」なものになることを重視しています。

講義では、教育関連学(高等教育論、教授学習理論、教育方法論、授業設計論、授業評価論、学習心理学、青年心理学、臨床心理学)の理論や、大学組織人として必要な管理運営、コンプライアンスなどの職能を扱い、ワークショップでは、アクティブ・ラーニングやICTを活用し、私立大学における多様な学生への指導を念頭に置いた授業技術や、アサーション・コミュニケーション技術などの実技演習と、受講者同士の公開授業と授業研究会の開催などを扱います。また、コンサルテーションでは、受講者同士やメンターによる日常的なピア・レビューを予定しています。

他大学との連携を踏まえて

実践的FDプログラムの開発ならびに大学教員に求められる教育力量の提案は一大学のみで実現できるものではありません。また、審議のまとめにも指摘されているように、私立大学ではFDセンター等の組織が未整備であり、個別に新任教員研修をはじめとするFDプログラムを開発することが困難な事例も散見されます。

本学は、「私立大学連盟」、「大学コンソーシアム京都」、「関西地区FD連絡協議会」、「山形大学との協力協定」などを通して、他大学とのFD連携を行っています。今後、多様な学生を数多く受け入れ、個別の大学理念・文化に基づいた教育を行う総合私立大学間においても、新たなFD連携を模索していきたいと考えています。



教育開発推進機構が担う新分野のご紹介

e-learningを活用したFD活動 「オンデマンド授業の推進」

教育の情報化は国の重要戦略の1つとして位置付けられ、ブロードバンド・ネットワークを活用した多様な教育コンテンツを充実・普及させることが課題になっています。これに関わり、近年、本学でもICTを活用したFD活動を進めてきました。

教育開発推進機構に設置された教育情報化開発・支援センターでは、これらの取り組みの一環として、時間と場所を問わず学習できる「オンデマンド授業」の企画、運営、推進を行っており、2008年度には5科目のオンデマンド授業を開講しています。

オンデマンド授業とは、大学のWebコースツールを使って、全てオンラインで受講する正課授業で、映像配信の視聴、小テストや小レポートの提出を、自宅や大学(マルチメディアルームなど)で、自分の都合のよい時間に受講できる授業です。

授業では電子掲示板を活用しており、先生だけでなく、他の受講生とも意見交換を行い、ピア・エデュケーションを促進させています。パソコンが使える環境であれば、場所の制約がなく受講できる特性を活かして、立命館の学生と同じ授業を早稲田大学や立命館アジア太平洋大学(APU)の学生が受講している授

業もあり、3大学の学生が活発に交流しています。

映像は毎週配信されており、決まった期間内で視聴して各課題を提出する構成です。授業内容で分からない部分があるとき過去の内容を振り返りたいときは、映像を何度でも視聴することができるため、同じ部分を重点的に学習できます。

FD活動の取り組みとして、オンデマンド授業を担当する教員は、予め授業設計を行い、インストラクショナルデザインの技法を学ぶことになっています。また、セメスター終了後も、担当教員は次年度の開講までに自分の映像を閲覧して授業内容を振り返ることができるため、授業設計の改善が可能です。

今後も、このような特徴を持つオンデマンド授業を拡大して、学生に質の高い教育コンテンツを提供するとともに、担当教員の授業改善に繋がる取り組みを広げていきたいと考えています。



オンデマンド授業一例
「現代環境論」木野 茂 教授

接続教育におけるFD活動 「入学前教育プログラムの再構築」

勝村 誠 教学部副部長・高大連携推進室長・政策科学部教授



立命館大学では高大連携推進室を中心に、特別入試合格者を対象とする「入学前学習プログラム」を提供しています。特別入試合格者の入学決定から入学までには時間がありますので、その貴重な時間を「入学準備期間」と位置づけ、有意義な学習をしてもらうのが趣旨です。また、毎年12月の下旬には「プレ・エントランス立命館デー」を開催しています。ここでは特別入試合格者全員を対象に、大学で学ぶことの意義についての講義、入学前教育プログラムの内容紹介、学習支援ツールとしてのポータルサイト(growing Rits)の説明などを行い、その後学部別に分かれて、学部における学びのガイダンス、推薦図書を紹介、現役学生との交流などを進めています。

さて、2008年4月に教育開発推進機構が設置され、機構内の研究センターとして接続教育研究センターが発足しました。高大連携企画の開発を進めてきた教員はこちらのセンターに移籍することになりました。これにより、本学の「入学前教育」は「接続教育」としての位置づけが明確に与えられたと言えるでしょう。そこで接続教育支援センターでは、このたび「入学前教

育プロジェクト」を組織し、「入学前教育プログラム」の再構築に取り組むことにしました。

本プロジェクトでは二つの研究に着手しました。一つは新入生を対象に実施している「基礎学力診断テスト」の結果分析です。入学時の本学学生の学力実態を把握し、入学前に補強すべき学力はどこかを検討します。その分析・検討結果を「入学前教育プログラム」の改善に繋いでいきます。もう一つは「入学前教育プログラム」受講者を対象とする調査です。受講にあたっての学習者本人の意識、受講した感想、受講した成果の振り返りにより、改善ポイントを探っていきます。

将来的には、本学が、ひいては各学部が入学時にどの程度の学力水準を想定するのかを明確にする必要があります。その水準に照らして、各合格者にいかなる「入学前教育プログラム」を受講してもらうのか、どこを補強すべきなのか、どの能力をいっそう伸ばすのかを明確にしなければなりません。それを踏まえて、本学の初年次教育の在り方も検討していく必要があると考えています。

第三者の 意見紹介



FD活動 — 私の理解

寺崎 昌男 立教大学 総長室調査役



07年9月と本年3月、中教審は2度の審議報告を発表した（「学士課程教育の再構築（審議経過報告）」「学士課程教育の構築（審議のまとめ）」）。これらに基づく大学設置基準の大幅改定によって、沖裕貴教授が指摘されているように（本誌8号）「授業内容改善のための組織的な研究・研修の実施」は本格的な推進対象となるだろう。FD（さらにSD）の全国的発達の年度が明けたことになる。

FDを発想する基本的な視点をどこに置いたらよいか。筆者はかねて次の3つを考えてきた。

- ①FD活動を授業改善に限定しない
- ②FD活動の多様性を承認する
- ③大学の個性に即したFD活動を創造する

①についていうと、日本の現行法令の規定するFD活動は、あまりに「授業改善」という1点に集中しすぎている。だから「授業評価はちゃんとやっています」と答えてFDが済んだと思う大学や学部も出てくる。

少し海外の資料を見てみるだけでも、いわゆるFD活動が実に幅広いものであることは明らかである。中教審自身が記しているように「広く教育の改善、更には研究活動、社会貢献、管理運営に関わる教員団の職能開発の活動全般」を指すのだと理解することが先決なのだと思う（「審議のまとめ」の「用語解説」の特に後段を参照）。

②もこれと連動する。FDは1時限ごとの授業の向上を助ける活動だけではない。授業の改革・創造のための活動である。授業の改革・創造はカリキュラムの改革を通じてなされる。

アメリカやドイツの例を見ても、カリキュラム改革は、教授会や教授団の「業務」などではなく、FDと表裏をなす事業だと見られている。そもそもFDは、個々の教員の授業の成功・不成功（もちろんそのことも大切な事であるが）だけに関わる活動ではない。実は「カリキュラム」というかたちで大学が迎え入れる文化・科学の総体をどう設定するか、また教員（集団）と学生（集団）の教

育・学習関係をどう設定するかという、総合的な教育課題に連なる活動であるからである。

③はさらに大切なことだと思う。画一的なFD活動が全国の大学に一齐に広がる、という風景が生まれるとしたら、なんとグロテスクな眺めであろう。しかも「義務化」の担い手は教員自身だというような誤解に基づいて、それへの参加が義務化されることにでもなったら、終末的である。

FD活動の形態やさらには目標・理念も、その大学独自のものであってよい。いや、独自のものであることこそが生命であろう。このテーマは、結局は「FDとアカデミック・フリーダムとの関係をどう考えるか」という問いに行き着く。教育界によくある強制的研修の徒労と倦怠を大学にまで広げてはならない。

以上のようなことを考えてきた。①②を生かして、「先ず今まで大学のなかで行ってきた『FD』を発見しましょう。それが第一の仕事です」などと勤務大学で進言したこともある。

だがこんな持論を書いてみて、どうにもむなしくなった。少なくともここに書くことではない。立命館大学では、SDも含めてこの大部分を実行されているように見えるからである。そのなされ方も、スムーズであるだけでなく、いかにも力強い。旧知の大学教育開発・支援センターを「教育開発推進機構」に改組強化され、実力ある教授たちを次々に迎えられている。それだけでも大きい動きなのに、本誌を読むと、「着任時研修」の実行、イギリス大学のFDヒアリング調査といった先端的な活動が、次々に実行されている。

「大学に企業秘密はない」というのが筆者の信じてきたことである。勤務大学の歩みはこれからで、これまでやってきたことも、スマートとも力強いとも言えない。これからも努めて情報交流をして、学び合って行くように進言しよう。もっとも当分は立命館を「仰ぎ見る」ことになるだろうが…。

報告

関西地区FD連絡協議会設立総会報告

教育の質を向上させるためのFDが、今年度から大学で義務化されました。すでに授業アンケートや講演会等の開催など8割以上の大学で実施されていますが、実質的、実効性のある取り組みとし、またそうした取り組みを共有化し、充実したFDを目指そうと、大学間の連携を進める動きが全国的に広がっています。

こうしたネットワーク化の動きが関西でも進み、「相互研修型」のFD推進を掲げた関西地区FD連絡協議会が設置されました（4月26日 於：京都大学芝蘭会館）。これまで、昨年1月に第1回準備会を開催して以降、「FDに関する実態とニーズ調査」（2007.6）、立命館大学で開催した授業評価ワークショップ（2008.1.12）などの活動を踏まえ、今回関西地区FD連絡協議

会に108校（登録組織数98校）の大学・短期大学が参加することとなりました。

総会では、文科省高等教育局大学振興課長の中岡司氏による祝辞に続き、「大学の教育改革とFD」と題して、天野郁夫氏（東京大学名誉教授）による記念講演が行われました。その後、多数の方々からFDネットワークの輪を上げ、意見交換を行いました。

立命館大学は、常任幹事校としてFD連携企画部に所属し、互いに共通するテーマを持ち寄り、継続的に情報交換をしながら、協働的に教育改善・FD・SDを進めるための緩やかなコミュニティ形成を支援し、教育を活性化する場にしていきたいと考えています。

学部・教学機関の教学的取組紹介

◆法学部 第1・2回法学部FD茶話会

宮井雅明 法学部 教授・FD委員長

法学部では、今年度からFD委員会を立ち上げました。従来から法学部は、企画委員会において詳細な教学総括や学生の学びと生活の実態分析を行ってきており、これをもとに教学改革の議論を継続的に行う体制を確立してきました。その他、基礎演習等、担当教員間で認識の共有や密接な協力が求められる科目について、随時、担当者会議を設置してきました。これらの活動は、FD活動としてもかなり高い水準にあると思われます。率直に言って、「今さらFD委員会を作って何をやれというのか」という思いがありました。しかし、改めて現状を振り返ると、年々教員の多忙化が進む中、授業におけるちょっとした工夫とか、学生気質の変化等について教員間で自由闊達な意見交換を行う機会が減ってきていることに思い当たりました。本学では、教学への組織的取組みの必要性が全学的に強調される傾向にありますが、それに比例して、教員が自発的に教学について意見交換する時間的、精神的なゆとりが奪われてしまっている気がします。

そこで、法学部FD委員会は、教員が自発的かつ自由闊達に教学について意見交換できる場を再生すべく、「FD茶話会」を開くことに

しました。これは、およそ月1回のペースで、文字通り、食事・飲み物つきで、多くの教員が関心をもてそうな教学上の問題について1時間程度意見交換するというものです。テーマを毎回設定し、テーマに相応しい話題提供者を選び、意見交換のきっかけになるような話を10～20分程度してもらったうえで、後は、自由な意見交換となります。

今年度の前期は、1・2回生配当の大規模専門科目における授業の工夫に絞ってテーマ設定することになりました。第1回目は、5月12日に、大規模専門科目において学生に自学自習を促すためのWebコースツール活用の試みについて、第2回目は、6月17日に、大規模専門科目の補習におけるTA活用の試みについて、それぞれ意見交換しました。いずれも、学部として組織的に取り組むべき課題をも展望するような、建設的な意見が多数寄せられました。意見交換におけるモットーは、どんな試み・提案も決して貶さないことです。何よりも、自発的で自由闊達な意見交換の雰囲気を作ることが重要だからです。興味をお持ちの方は、学部外からでもお気軽にご参加いただければと思います。

◆生命科学部・薬学部における英語教育の取り組み プロジェクト発信型英語プログラム

鈴木佑治 生命科学部 教授 関口幸代、近藤悠介、山中 司 言語教育センター 講師

生命科学と薬学を含めた科学技術の分野は国際化が最も進んでいます。生命科学および薬学の研究者または技術者として活躍するためには、国際規模のプロジェクトに参加しその成果を発信する能力が必要です。そのような国際規模のプロジェクトでは、様々な国の人たちと英語で意見を交換し、英語の文献や資料から情報を集め、批判的に分析して自分の考えをまとめて英語で発表し討論する能力が不可欠です。

本英語プログラムは、①プロジェクト、②スキル・ワークショップの2つで構成され、4年間の学部在学中に、生命科学・薬学の先端的研究プロジェクトを英語で行い、その成果を英語で発信する能力の育成を目標に掲げています。またICTを駆使して、学生が主体的に学習に取り組めるよう支援しています。

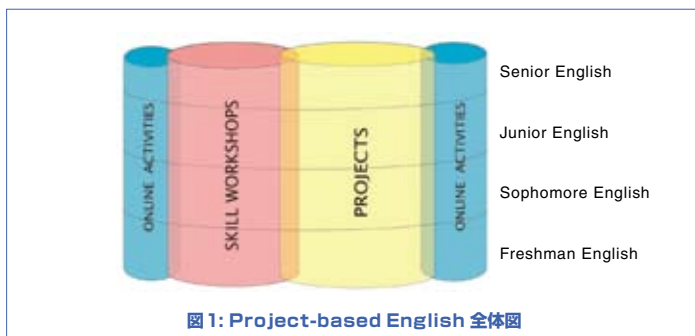


図1: Project-based English 全体図

では日常生活、クラブ活動、授業から関心のあるテーマを選び、プロジェクトを行います。3回生では専門分野からテーマを選び、よりアカデミックなプロジェクトを行います。4回生は卒業研究の一環として、日本語で書いた卒業研究のアブストラクト（概要）を英語で書き、口頭発表できるようにします。

スキル・ワークショップとは

英語でプロジェクトを行い、その成果を発信するためには、English Skills (Listening, Speaking, Reading, Writing)とEnglish Competence (Syntax, Pronunciation, Vocabulary/Expression) の能力を同時につける必要があります。スキル・ワークショップでは、コミュニケーション活動を通してそれらを総合的に学習します。

デジタル・メディアのフル活用

将来学生が国際的なプロジェクトに参加するためには、先端的なデジタル・メディアの活用が必要不可欠です。図1の2本の青色の柱が示すように、プロジェクト、スキル・ワークショップを含めて授業に関する全活動はWebコースツール等を活用しオンライン化されています。プロジェクトでは、国際的な会議を想定し、デジタル・メディアを駆使した発表を行っています。宿題をすべてWebコースツールに書き込み、お互いに意見を交換し合っています。スキル・ワークショップではクラス外活動として、英語のスキルを向上させるため、学生はWebコースツール上で自学自習を行っています。また生命科学部・薬学部の学生のための辞書をオンラインで作成するため、mediawiki等を活用しています。

プロジェクトとは

学生が各自のテーマを設定し、プロジェクトを行います。そのプロジェクトを通して自分の考えを探索し成果を発信します。1・2回生

2008年度 Teaching Assistant 全体研修を開催しました

【2008年5月22日 衣笠キャンパス／2008年5月23日 びわこ・くさつキャンパス】

研修の様様

昨年度策定したTAガイドラインの趣旨を踏まえ、TAを担う大学院学生に対して初の全体研修を開催しました。研修は衣笠キャンパス及びBKCでそれぞれ1日ずつ開催し、参加者数はあわせて541名と多数のTAが参加しました。

プログラムは、昨年度末実施したTA及び専任教員への調査で研修希望の多かった内容を優先して、「TA制度や実務」「教学の基礎」などの講義を主なものとし、教育開発推進機構の宮浦講師ほか、担当職員が講師となりました。当日、研修参加者に対して行ったアンケートの回答では、すべてのプログラムについて、半数以上の参加者から「役に立った」という肯定的意見が得られ、おおむね研修の目的に沿った効果をあげることができました。



なお、この研修の様様は以下のURLにてweb配信しており、当日配布資料についてもこのページからダウンロードが可能です。今後TAに業務を依頼する教員やTAを希望する大学院学生など多くの方々の積極的な活用を期待しています。

URL:<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/in/website/index.html>

さらなる改善に向けて

本学初の試行的な取組みであった今回の研修は、概ね当初の目的は達成しましたが、同時に研修内容に関する希望や改善に向けた提案も寄せられました。本年9月に実施予定の第2回全体研修では、これらの希望や提案を可能な限り反映し、TA制度の内実化を通じた本学教学のさらなる活性化に生かしていきたいと考えています。



参加者の感想より

◎理工・修士課程前期2回生

2年間TAを行ってきましたが、この講習を受けて、TAの意義そしてTAの本来の仕事内容を再確認できました。また、今後のTA活動については今日聞いたことを意識し、学生のためや自らのキャリアアップのために活かしていきたいと思います。

◎文・修士課程前期2回生

ワークショップの経験は初めてだったので、大変よい勉強になりました。これを活かしながら、学生とのコミュニケーションがとれればと思います。

◆9月29・30日に2008年度後期TA全体研修を実施します。詳細はホームページでお知らせします。

学外FDフォーラム探訪記

大学コンソーシアム京都主催 第13回「FDフォーラム」参加者報告 2008年3月8・9日 立命館大学

教員 神藤 貴昭 経済学部准教授

3月8・9日に立命館大学で行われたコンソーシアム京都主催・第13回FDフォーラムに参加しました。私が報告者(当時・徳島大学教員)として参加した第8分科会「授業支援の新しいあり方」では、関西大学(Student AssistantとAdvisory StaffによるFD支援など)、法政大学(初年次教育モデル授業公開など)の事例が紹介され、私は徳島大学の事例(授業コンサルテーションなど)を紹介しました。大学におけるFDが義務化された今、各大学ともFDのためのFDではなく、実質的なFD、さらに言えば「教員が楽になる」ためのFDを構築することに力を向け、またそのことに悩んでいるという健全な姿を見ることができました。

学生 平野 優貴 学生FDスタッフ 政策科学部3回生

私は、学生と教員が授業のあり方について議論する第2ミニ・シンポジウムに参加しました。学生代表として共に参加した佛教大学の学生や、フロアとして参加していた岡山大学の学生と積極的な意見交換ができ、非常に有意義でした。両大学にはそれぞれ立命館大学とは異なる特色があり、多様な学生が学ぶ総合大学である立命館大学でFDに取り組む際のヒントにすべきものを得ることができました。

一方で今後の課題も浮き彫りになりました。フロアに一般学生の姿がほとんど見受けられなかったことです。学生が授業に積極的に向き合い、主体的に学んでいく雰囲気づくりを、私たち学生FDスタッフが中心となって進めていかなければならないと感じました。

職員 山崎 大輔 政策科学部事務室

私が参加した第9分科会「大学における総合的な学生支援と学生相談体制」には、関西を中心に全国から教職員・カウンセラー・学生約40名が集まりました。日本学生支援機構が発行した報告書をもとに研究報告や他大学学生相談室での取り組み紹介があり、各参加者が日々の業務において直面している課題や疑問について講師から様々なアドバイスを受けました。FDフォーラムの第13回目にして初めてテーマに取り上げられたという「学生支援・学生相談」ですが、大学をめぐる情勢の変化と学生が抱える問題の多様化・複雑化が進む今、これらを教育の一環として捉え直すことが必要です。現行体制の検証を踏まえ、全教職員が一体となって大学全体の学生支援強化に努めていかなければならないと改めて痛感しました。

山形大学と立命館大学の包括的協力協定締結について

2008年6月、本学と国立大学法人山形大学は教育・研究・その他諸活動の分野において学術的および文化的交流を深めることを目的として包括的協力協定を締結しました。

山形大学は6学部と5研究科を擁しており、学生数は約1万人と東北地方有数の総合大学です。キャンパスは県内4地域（小白川・飯田・米沢・鶴岡）にまたがっています。学生は基本的に、1年次は小白川キャンパスで教養教育を中心に学び、その後各キャンパスに分かれ、専門教育を学びます。

山形大学は本学と同様「学生が主役の大学創り」をコンセプトに、



2004年度以降「地域ネットワーク“樹氷”」や「東日本ネットワークつばさ」など実質的なFD活動の推進や教学改善への学生の参画などに積極的に取り組んでいます。本学とはその設置形態、立地、規模等において異なる点も多くありますが、互いの特性を活かし、両大学の連携・協力で新しいことを創造していきたいと考えています。

初年度となる2008年度は、①学長による相互講演②学生交流③職員交流を軸に交流を進める予定です。さっそく、7月3日（木）には朱雀キャンパスにおいて、山形大学結城学長による講演会が実施されました。教職員含め約80名が講演会に参加し、質疑応答も活発に行われました。立命館大学川口学長は10月に山形大学で講演を行います。学生交流および職員交流は秋以降に両大学の訪問を通して行われ、12月20日には合同報告会を行い、交流の成果を発表する予定です。

川口学長のFD通信 山形大学と立命館大学の「包括的協力協定の締結」挨拶より(2008.6.19)

18歳人口の減少や国立大学の法人化に伴い、各大学の競争的な環境は激化しており、各大学とも生き残りをかけて改革に取り組むようになっています。

今ほど、大学教育の質が問われている時代はありません。現在の立命館大学改革の焦点は、FD（ファカルティ・ディベロップメント）にあたっています。「学習者を中心とした教育」というコンセプトを掲げ、FDに積極的に取り組んでいます。

本学は他大学に先駆けて、時代と社会の要請に応える改革に取り組んできました。しかし、1私立大学ですべての要請に応じていくことには限界があります。本学はこのことを早くから認識し、連携・ネットワークによる大学・学園づくりを進めてきました。例えば1994年には、本学が中心となって設立した京都・大学センター（現在の財団法人大学コンソーシアム京都）の発足に始まり、2002年から滋賀医科大学、2005年か

ら京都府立医科大学、2007年から関西医科大学、京都大学との連携を締結し、教育・研究を進めてきています。

今回、本学は山形大学と包括的協力協定を締結し、大学の教育力を高めるFDの取り組みを活性化させます。

山形大学は「学生が主役となる大学創り」をコンセプトに掲げ、「地域ネットワーク“樹氷”」や「東日本FDネットワーク翼」など、国内随一の実質的なFD活動を展開しています。これらの山形大学の取り組みに、我々が学ぶべき点も多いと認識しています。

本学と山形大学は、設置形態、立地などでは、全く異なった大学でもありますが、社会的要請に応えるという目標において、目指すものは同じであります。両大学が連携・協力することによって、様々な重層的な交流が活発に行われ、これまでになかった新しいものが生まれることを期待しています。

紀要『立命館高等教育研究』の原稿を募集しています

教育開発推進機構では、学園内の組織ならびに個々の教職員の教育に関する研究成果などを収集・蓄積・発信することにより、組織的なFD活動、SD活動の進展を目指して、『立命館高等教育研究』を発行しています。

第9号の募集要項は下記の通りです。投稿ご希望の方には、「執筆要領」、「投稿規程」、「投稿申込書」を送付しますので、教育開発支援課までご連絡下さい。また教育開発推進機構のホームページからもダウンロードしていただけます。皆様からのご応募をお待ちしています。



募集要項

- ◎ **応募資格** 立命館大学および立命館学園の教職員
- ◎ **掲載内容** 立命館大学および立命館学園をはじめとした大学や教育機関の教育や教育実践に関する論文および報告
- ◎ **字数** 論文、実践研究、報告ともに20,000字以内
※上記字数には本文・注・図表・参考文献等を含む。
※1頁：42字×39行
- ◎ **応募方法** 「投稿申込書」に必要事項を記入の上、事前に教育開発推進機構事務局（教育開発支援課）に提出
- ◎ **提出方法** 原稿は印刷物とフロッピー等のデジタルデータで提出
- ◎ **原稿締切日** 2008年11月30日（日）※当日消印有効
- ◎ **発行（予定）** 2009年3月31日（火）
- ◎ **留意事項** 投稿の際には「執筆要領」、「投稿規程」を必ずご参照下さい。

教育開発推進機構のウェブサイトがリニューアルしました！

教育開発推進機構では、2008年7月にウェブサイトをリニューアルいたしました。今後、FD関連情報等、役立つ情報を充実させていきます。ぜひご覧ください。

リニューアルに伴いURLを変更いたしました。

<http://www.ritsumeikan.ac.jp/acd/ac/itl/index.html>

